

親鸞仏教センター通信

 2011.
March

第37号

2011年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp

仏弟子として生きるということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

「涅槃の城には、信をもって能入とす」と言う源空の教えに帰した親鸞の自覚には、「汝は必ず成仏道を成就するであろう」と教主によって授記された、世尊在世時代の高足の弟子たちと同質の喜びがあったのではないか。正定聚とは、正しく成仏を確定したともがらをいう語である。だから正定聚には「授記」と同格の意味があると了解されてきた。それで、阿弥陀の浄土に生まれた者には「正定聚」の位を付与すると誓うことが、仏道上に大きな意味をもったのである。その正定聚を現生に獲得できるのが、本願の信心の利益だと親鸞は主張する。それは凡小がこの身で、仏弟子として授記を得るのと同格であることの確信による。

この信念を支持する第一の理念は、「如来の回向」ということであろう。菩薩道成就の修行の功德の一切を、愚かな凡夫に施与したいというのが、法蔵菩薩の弘誓の止むに止まれぬ要求なのである。だから、「凡小を哀れみて、選べて功德の宝を施する」(『真宗聖典』152頁、東本願寺出版部)のために、名号に一如宝海の功德をこめたのだ。したがって、この願心に値遇するなら、罪惡深重の身を障りとせず、凡夫に正定聚の利益が届けられるのだ、というのである。

そしてさらに、このことを親鸞が確信した背景には、『教行信証』『教巻』に引用される『大無量寿経』の「出世本懷」の文との値遇があるのではないか。あの段の「光顔巍巍」たる釈尊のお姿の意味を「如来出世の本懷」であると見たのは、「世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲」(同)したという仏語自体によるのであろうが、阿難の問いにある「仏々相念」もそれに関わるといえるのではないか。

『大無量寿経』はそもそも諸仏の伝統から説き出されている。五十三仏が語られて、世自在王仏がその伝統から現れ、そのもとに法蔵比丘が出家するという展開なのである。三世諸仏の伝統とは、人類が真理を求めて歩んできた歴史であり、「古仙の道」を発見してきたことへの信頼の表現なのではないか。この求道心の伝統の世界へ参入して呼び起こされる喜びが、光顔巍巍となるのではなからうか。この諸仏の称讃する精神空間に立たれたところに、光顔巍巍たる如来の歡喜があり、その歡喜がわれわれにも恵まれることが「諸仏稱揚の願」による「大行」のはたらきだと信受するといえるのではなからうか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」①⑦

絶対受身に立つ

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第38回、39回が東京国際フォーラム（千代田区）で行われ、「第18願（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行なわれた第36回からその一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■ 往相・還相回向の問題

親鸞聖人がおっしゃる回向によって成り立つ教え、回向によって成り立つ「行」、回向によって成り立つ「信」、回向によって成り立つ「証」、こういう教えが立つということは、自分は徹底して回向をいただく身、絶対受け身と言いますか、回向のはたらきに歩まされる存在である。能動は如来のはたらきであって、人間は受動であるという立場をくずさない。そういうことがはっきりしないと、この回向の教えは本当には明らかにならないのではないか。

それは、これまでの教えの了解に、どうにもわからない問題があった。何かというと、回向に二種の相あり、往相の回向と還相の回向の二つの相があると曇鸞が言っていて、今までの教義学の正統的理解というのは、回向のはたらきは如来からいただく。浄土に往相するのが衆生の相（すがた）だと。浄土に往相したら、今度は浄土から還相するのも衆生の相（すがた）だと。だから往相と還相という相は衆生に属すると。そう

すると、この愚かな凡夫が念仏に出遇って浄土に往き、浄土から還ってくるという、往ったり来たりは衆生に属するというイメージが残る。どうもそれはおかしい。それは中途半端なのです。往相・還相が衆生の相だと解釈するところには自力のなごりがあるのではないか。そう私は問題提起したわけです。

親鸞聖人の書いておられるものを読むと、衆生が往ったり来たりするイメージとは矛盾する言葉がいっぱいある。二種の回向、往相・還相の回向は弥陀の回向である。この往相・還相の回向にもうあう、値遇すると言っている。如来二種の回向によって信心を得ると書いてある。自分が往ったり来たりするなど、親鸞聖人はどこにも書いていない。今までの教義学が間違っていたのではないか。解釈学が間違っているのであって親鸞聖人は間違っていない。それは徹底的に受け身で如来の本願力をいただく。教義学は受動のような顔をしながら、回向だけいただいて、自分でやるという話にした。その他力は本当の他力ではないのではないか。

■ 南無阿弥陀仏が体

こちらに穢土があって、向こうに浄土を立てて、人間は浄土に往たらたすかるといふ、そういう浄土教に対して、親鸞聖人は本願が中心だと。念仏が体だと。善導大師は、『観経』は「一心に回願して浄土に往生するを体とす」（『真宗聖典』333頁、東本願寺出版部）と。往生浄土がこの經典の体だとおっしゃっているのです。「往生」をもって体とする。ところが親鸞聖人は、「南無阿弥陀仏」が体だと言ってい

るのです。『教行信証』に「『大無量寿経』、真実の教、浄土真宗」と、こう書いて『大無量寿経』の体は仏の名号、「南無阿弥陀仏」だと。このことの意味の違いをはっきりさせてなかったのが今までの教義学です。

穢土と浄土を立てて、穢土から浄土に往たらすけてやると教えるのは方便化身土だと親鸞は言うのです。すごい考え方だと思うのですよ。真実には「南無阿弥陀仏」に本願の体がある。「南無阿弥陀仏」の体をもって宗教的満足をいただくことが信心だと。そうすると、この信心は信ずることを出発点として何かをやっていくのではない。誓えるなら、あなたを信じて結婚します、それから生活していきましょうねと、そのような頼りない話ではないのです。信ずることがもう結論だと。本願を信ずればたすかる。信ずるということがたすかることだと。

でもみんなそれを素通りして、今、信をもててたすかっても、浄土に往って本当はたすかるのだという二重写しで考えた。そうすると生きている間はやはり本当にはたすからない。あるいは、まあ、二回たすかるというか、今生でたすかって、もう一回浄土でたすかる。そういう教え方をするわけです。現生の利益と当生の利益とか、此土の利益と彼土の利益とか、二重構造で救いを考える。

でも、親鸞聖人はそのようなことを言っていないのです。だから難しいと言えは難しいのですが、本願の救いをどこでいただくのか。如来が本願の教えを立てて、本当に衆生を救いたい、衆生を絶対満足させたいと誓っているのに、美味しいケーキだけれど半分だけ今日いただいて、後の半分は明日食べますと言って腐ってしまったような話でね。そういう救いが本願の救いではないのではないのか。本願の經典、本願の救いの体は「南無阿弥陀仏」であるということは、「南無阿弥陀仏」以外にもう一つ救いが欲しいということが教えられているのではないのだということです。

自分が往ったり来たりする、そうしないとまだ自分が自分になっていないというのは、自力

が残っているからです。まだ自分が何かをしたい。自分が本当の仏道の仕事をしたい。今はできない、だから如来さまのはたらきをいただいて、浄土に往って、それからやりましょうと。これは表現としてはあってもしかるべきで、『歎異抄』にはそういう表現があります。あるけれども『歎異抄』は唯円にわかり易いように、ある意味で方便しているところがあると思うのです。親鸞聖人の本質は『教行信証』にある。「南無阿弥陀仏」を手段としてそれを使ったらいいところへ行けますよという教え方は、方便なのです。でも、「南無阿弥陀仏」が人間をたすけるための手段だという考え方を親鸞はとらない。「南無阿弥陀仏」は「大行」だと。そこに本願が全面的にはたらくのだと。一部分「南無阿弥陀仏」としてはたらいて、一部分浄土を建立して、「南無阿弥陀仏」を使ったら浄土に入れますよと、そんなことを親鸞は書いていないです。

いや、教義学というのはこわいなと思って。長い間教えを聞いていましたから、私もそうかと思って、そういうふうを考えようとする、どうしても親鸞聖人の言葉にわからない言葉が出てくるのです。ですから絶対受け身に立つという姿勢、その立場を離れないということが、親鸞の教えの本質だと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開（無料）で開催しています。

記

日時：2011年3月 9日(水)午後6時30分～9時

4月 休 会

5月10日(水)午後6時30分～9時

場所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

現代と親鸞の研究会・第37回

病むこと、生きること

—べてるの家の歩みかた—

北海道医療大学教授・浦河べてるの家理事 向谷地 生 良



向谷地生良 氏

2010年11月1日、東京国際フォーラム（千代田区）において、北海道医療大学教授である向谷地生良氏をお迎えし、「現代と親鸞の研究会」を開催した。向谷地氏は精神病を抱えた当事者たちによる共同体「べてるの家」に設立当初から関わり、専門家による一方的な治療を離れ、あくまでも当事者を中心とした立場から、先進的な活動を行われてきた。研究会では、約三十年に及び当事者との関わりの中から見えてきた、「病の意味」について語っていただいた。ここにその一部を紹介したい。

(研究員 花園一実)

■ 日本の精神医療の現実

日本の精神保健は、国がどんどんお金を注ぎ込み、病院やベッドを増やし続け、今では世界中の精神科のベッドの二割を日本が抱えているというのが現状です。患者さんたちが飲まされている薬も、医師の裁量ですべて決まりますから、その結果、日本の精神科の患者さんが飲んでいる薬の量は、世界の先進国の平均の五倍から十倍の投与量という、まさに薬漬けの状況になっています。その国のわきまえというものは、その国の精神科の患者さんがどう扱われているかを見ればわかると思いますが、日本という国は、高度経済成長の中で、病に倒れた人はどんどん病院に送り込んで、そして新しい労働力を抱え込んでいくことの繰り返しの構造がありました。世界中の先進国がベッドを減らしてきた中で、日本だけがひたすら精神科のベッドを増やし続けている。日本の精神医療の予算は年間約一兆九千億円ほどですが、その予算のうち九割は医療費に当てられ、福祉に向けられる予算は一割に満たないのです。この歪み

が、ますますこの現状を増長させています。残念ながら、これが今の日本社会のあり方です。これは精神医療の分野だけではなく、あらゆる面にこの傾向があり、私たちの大事な何かをむしばんでいるような気がします。

■ 病むことの意味

精神障害をもつことの意味を考えたとき、もちろん脳の中で何が起こっているのかということ、研究してみてもまったく無意味なことではないと思いますが、しかし私は「そうしないと生きていけない」という、「生きにくさ」の象徴として人は病んでいると思うのです。なぜなら、薬の力によって幻聴が取り去られた人たちは共通してこういふことを言うのです。「心が空っぽだよ。向谷地さん、幻聴さんのいた非現実的世界から抜け出て、現実世界で心が空っぽだよ」と。症状が改善して、気持ちが落ち着いて、イライラもなくなった。喜ぶべきことにもかかわらず、その症状が改善した人たちは、未来が見えない、わからないと言うのです。医学的・人間的に症状が改善したという状況に立ったとき、そこに見えてくるのは、もともと病気の症状の陰に隠れて見えづらかった生きにくさ、その現実が病気の症状の裏側から頭をもたげるわけです。ですから症状の回復した後というのは自殺率が高まる。これは統合失調症や鬱などの回復期には共通して見られる心の危機ですが、この問題に対しては精神医学というものはまったくなす術をもたないのが現実です。これは統合失調症の女性のメンバーの言葉です。「幻聴が和らいだ時期がある。幻聴が和らぎ雲の切れ間から日が差すような感じになった時の空虚さに私は耐えられなかった。私は代償としてアルコールに浸り、買い物に夢中になっていった。つまり、幻聴と被害妄想は空虚さとい

う私の心の隙間を埋め尽くし、生きていることの虚しさという現実から私を避難させるという役割を果たしていたとさえ言える。被害妄想だと気づくことそのものが私にとっては怖いことだったのかもしれない。長い間、統合失調症をもった人たちが、まさかこんなことを考えているはずがないと思われていました。統合失調症は単なる脳の器質的なトラブルで、特效薬が開発されれば、すべて解決する問題だと言われていた。しかし、薬物療法が一般に普及する前の精神科医たちは実はみなさんこういうことに気づいていたのです。ところが薬物療法が主流になり、精神疾患は単なる脳のアクシデントだという考え方が主流になってきたときに、私たちは「病む」ということの意味を見失ってしまった。これが一番の問題なわけです。

■ 弱さを絆に

木村敏という精神病理学者は、まだ日本に精神科薬が登場する前から精神科の医者をやっていたという貴重な経験をもっておられるのですが、彼は、精神病の根源は個人ではなく、個人と個人の関係性、「あいだ」にあると言います。二百年前に近代化が始まって、その近代化と共に統合失調症が始まった。それは何に起因しているかというと、人間が科学というものを手に入れることによって、あらゆるものを数字に置き換えて考える思考を身につけたということです。それは生きること死ぬことの、生命観を失うことです。わかりやすいこと、説明しやすいこと、合理的なもの、そういうもののみを扱う世界に生きるうちに、私たちは目に見えないもの、言葉では表現しにくい、ある種の何か不思議な生命観、木村敏の言う「大きな命」を感じる心を失ってしまったのです。もし統合失調症や精神疾患が、その「大きな命」に関わるものならば、私たちは何によってそれを取り戻せるのだらうと思った時、私はそれを「弱さ」だと思っているのです。ご自身、重い障害をもちながら口で絵筆をとり、草花の絵を描いておられる星野富弘さんがこんな詩を書いています。「よるこびが集まったよりも 悲しみが集まった方が しあわせに近いような気がする 強いものが集まったよりも 弱いものが集まった方が 真実に近いような気がする しあわせが集まったよりも ふしあわせが集まった方が 愛に

近いような気がする」。アメリカから入ってきている支援プログラムの基本は「強さ」です。病んでいることではなく、健康に焦点を当てて、そこを強化する、そういう合理的なモデルがアメリカから入ってきて急速に広がっています。しかし、そういう流れの中で「べてる」だけはまったく違う路線を歩んできたのです。弱さを絆に、むしろ人間のもっている弱く^{はかな}い部分こそが人間であることの大切な部分であって、それをつなぎ合わせたときに本当の人の強みというものが生まれる。そういうものを私たちは大事にしてきた。それは実際に病気を抱えた人たちと生き合う中で、そのことの方が本当にみんな生きやすくなるという事実から得たもののなのです。(文責：親鸞仏教センター)

※向谷地生良氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第23号(2011年12月1日号)に掲載予定です。

向谷地生良(むかいやち いくよし) 北海道医療大学教授・浦河べてるの家理事

1955年生まれ。北星学園大学社会福祉学科卒業。78年浦河赤十字病院医療社会事業部ソーシャルワーカー、01年北星学園大学非常勤講師を経て、03年北海道医療大学に就任。06年より同教授、現職。専門は精神障害リハビリテーション メンタルヘルス・ソーシャルワーク。84年に精神障害を経験した当事者ととともに「浦河べてるの家」を設立。理事。

著書に、『安心して絶望できる人生』(日本放送出版協会)、『技法以前-べてるの家のつくりかた(シリーズケアをひらく)』(医学書院)、『統合失調症を持つ人への援助論-一人とのつながりを取り戻すために』(金剛出版)、『ゆるゆるスローなべてるの家-ぬけます、おります、なまけます(ゆっくりノートブック)』(大月書店)など多数。



「現代と親鸞の研究会」(千代田区の「東京国際フォーラム」で)

き人などは、いし・かわら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとえたまえるなり。摂取のひかりともうすは、阿弥陀仏の御ころにおさめとりたまうゆえなり。文のころは、おもうほどはもうしあらわし候わねども、あらあらもうすなり。ふかきことは、これにておしはからせたまうべし。この文は、慈愍三蔵ともうす聖人の御釈なり。震旦には、恵日三蔵ともうすなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五三頁)

語 註

①「われら」この表現は、親鸞の著作全般に見ることができ。例えば、

「龍樹大士世にいでて 難行易行のみちおしえ 流転輪回のわれらをば 弘誓のふねにのせたまう」(『高僧和讃』『真宗聖典』四九〇頁)

「十方衆生」というのは、十方のよろずの衆生なり。すなわちわれらなり。

「凡夫」は、すなわち、われらなり。

「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなれることあるべからざるをわれみたまいて」(『念多念文意』同『五四四頁』)

「歎異抄」同『六二七頁』

試訳をめぐって

【原文】りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

【現代語訳】獵師、商人といったも、それは他人事ではない。どんな人も、石・瓦・礫のごとき「我ら」なのだ。

「りようし・あき人」をもって象徴されているのは、助からない存在ということである。例えば、「殺生している自分は救われるんですか？」という切実な問いが、当時の「りようし」という言葉には含まれていたのではないだろうか。そのように考えてみると、親鸞が「われらなり」と言い切られていることに、少なからずハッとさせられる。

ここで注意すべきは、「われら」は「みんな一緒」という意味ではないということである。複数のニュアンスをもちつつ単数であることを表現できる言葉、それが「われ」でも「われわれ」でもない、「われら」である。

また、「われら」とはうなずきの言葉でもある。助からない存在であるということが自身の内に見いだされて、初めて「われら」と言えるのである。すなわち、「われ」の自覚があつて「われら」の世界が開かれてくる。語りかける相手を包みながら、人間存在の事実を訴え、目覚めを促し続ける言葉なのである。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

ら」なのだ。如来の誓いを疑いなく信じるならば、阿弥陀の摂取の光の中に救われ、摂取られ、必ず大涅槃の覚りを開かせてくださるのである。すなわち、獵師、商人などに大涅槃の覚りを開かせてくださるその様を、あたかも石・瓦・礫などを黄金へ変えてしまうようである、と喩えるのである。摂取の光というのは、阿弥陀如来の御心に我らを摂取してくださいから、そのように言われるのである。

この(五会法事讃からの)文の意を、ここでは十分に言い尽くすことはできないが、おおよそのことは申し上げたつもりである。深い意味は、以上申し上げたことから推し量って考えていただきたい。この文は慈愍三蔵という聖人の御解釈の言葉である。この方は、中国では、恵日三蔵と呼ばれている。

『anjali』第21号および

『現代と親鸞』第22号を刊行

このたび、『anjali』第21号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第22号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第21号では、東京外国語大学学長の亀山郁夫氏、上智大学グリーンフーズ研究所所長の高木慶子氏、東京大学先端科学技術研究センター教授の福島智氏、サバイバル登山家の服部文祥氏、国際日本文化研究センター客員准教授片山杜秀氏、写真家の藤原新也氏、静岡大学名誉教授の山下秀智氏、作家の車谷長吉氏、東京大学東洋文化研究所教授の安富歩氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第22号では研究論文のほか、「現代と親鸞の研究会」から、東京大学名誉教授の大井玄氏、東京大学東洋文化研究所教授の安富歩氏の問題提起と質疑。「現代の諸課題と対話する研究会」から、龍谷大学法学部教授の鍋島直樹氏のインタビュー内容。「第3回研究交流サロン」から、東京大学大学院人文社会科学系研究科教授の下田正弘氏からの発題と、森田療法研究所所長の北西憲二氏を迎えての討議の様子。「親鸞仏教センターのついで」から早稲田大学国際教養学部教授の竹田青嗣氏と、本多弘之所長の講演。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。



現代と親鸞



『聖典』の試訳（現代語化）

「りようし・あき人」は「屠沽の下類」である、ということが前号（第36号）に記されている。当時、「りようし・あき人」は蔑まされる存在であったということが、そこから窺い知れる。「いし・かわら・つぶて」と言われていることからわかるとおり、それは取るに足りない「もの」ということなのである。それゆえ、しばしば社会階層論として読まれるのがこのたびの試訳箇所である。「りようし・あき人」という言葉が、社会の底辺を生きるものの象徴として理解され、「いし・かわら・つぶて」という言葉は、時に差別に対抗する言葉として持ち出され、あるいは底辺を生きるものに共感するというかたちで差別意識を覆い隠す言葉として使われるのである。果たしてそうであろうか…。

文中の「われら」とは、社会階層論を人間存在論へと転じさせる一語である。「われ」ばかりを声高に叫ぶ今の時代に、その一語はどう響くのだろうか。

（嘱託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑬

原文

「能令瓦礫變成金」というのは、「能」は、よくという。「令」は、せしむという。「瓦」は、かわらという。「礫」は、つぶてという。「變成金」は、「變成」は、かえなすという。「金」は、かねという。かわら・つぶてをかねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、摂取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りようし・あ

現代語訳

「能令瓦礫變成金」の「能」は「よく」ということであり、「令」は「させる」ということであり、「瓦」は「かわら」ということであり、「礫」は「石ころ」ということである。「變成金」の「變成」は「変えてしまふ」ということであり、「金」は「かね」ということである。瓦・礫を黄金に変えてしまふようである、というのは如来の本願力を喻えたものである。

獵師、商人といつても、それは他人事ではない。どんな人も、石・瓦・礫のごとき「我

親鸞仏教センターの動き
(2010.11～2011.1) 抄出

■2010年

11・1 第37回現代と親鸞の研究會「病むこと、生きること―べてるの家の歩みかた―北海道医療大学教授・向谷地生良氏（東京国際フォーラム）

■2011年

11・2 第38回英訳「教行信証」研究會
11・9 第39回清沢満之研究會
11・12 第40回鈴木大拙訳「教行信証」研究會
11・24 第41回「教行信証」真仏土・化身土巻研究會「公開講演会2010」テーマ「ことばに生きる」世界を再生するために。NPO法人森づくりフォーラム代表理事・内山節氏、本多弘之所長（千代田区・ベルサール神田）

■2011年

11・29 第6回研究員と読む公開輪読會「現代から『御文』を読む」①11/29②12/6③12/13
12・1 第42回「唯信鈔文意」研究會
12・30 第43回「唯信鈔文意」研究會

■2012年

12・10 第44回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第45回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第46回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第47回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第48回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第49回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第50回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第51回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第52回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第53回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第54回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第55回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第56回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第57回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第58回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第59回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第60回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第61回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第62回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第63回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第64回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第65回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第66回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第67回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第68回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第69回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第70回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第71回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第72回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第73回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第74回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第75回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第76回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第77回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第78回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第79回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第80回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第81回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第82回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第83回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第84回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第85回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第86回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第87回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第88回「唯信鈔文意」研究會

■2011年

12・10 第89回「唯信鈔文意」研究會
12・14 第90回「唯信鈔文意」研究會
12・15 第91回「唯信鈔文意」研究會
12・16 第92回「唯信鈔文意」研究會
12・22 第93回「唯信鈔文意」研究會

● 英訳『教行信証』研究会報告 ⑧ ●

念仏の内実としての一念

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村晃徳

英訳『教行信証』研究会は親鸞仏教センター開設当初から開催されており、2011年1月で124回を数える。鈴木大拙師の英訳『教行信証』を学ぶことにより、見えてくるものは、師の親鸞理解の深さである。

(嘱託研究員 田村晃徳)



親鸞仏教センターでは英訳『教行信証』研究会と同様に、清沢満之研究会も開設当初から継続されている。清沢満之と鈴木大拙は言うまでもなく、近現代の日本仏教史において欠かすことのできない二人であろう。両者の共通点は世界を相手に宗教、特に仏教を紹介したことにあると言ってよい。英語に長けていた両者はそれぞれ英訳の本を著している。清沢は『宗教哲学骸骨』の英訳“*The Skeleton of A Philosophy of Religion*”であり、鈴木は多数出版していることは言うまでもない。親鸞仏教センターが両者の研究会を行っていることは示唆的である。それは、親鸞の思想を現代に紹介するということに、念頭に置くべき相手は世界であることを示しているのである。

また英訳『教行信証』を研究して思うのは、その著がもつ重要性にもかかわらず、先行研究がほとんどないことである。その点でもセンターが英訳『教行信証』研究会を開催していることには大きな意味があると言える。



現在は「行巻」を継続して読んでいる。具体的に『真宗聖典』（東本願寺出版部、以下『聖典』と略記）で言えば176頁の『観経四帖疏』のいわゆる「六字釈」までを講読してきた。現代語訳を通じて印象的な箇所は多くあるが、最近の研究会からそのなかの一つを紹介したい。それは念仏の質をめぐっての訳である。

例えば、「いかにが『護念』と名づくる、と。もし衆生ありて、阿弥陀仏を称念せんこと、もしは七日、一日、下至一声、乃至十声、一念等に及ぶまで、必ず往生を得と」（『聖典』176頁）の文は次のように英訳されている。

Why is the Sūtra called “Guarded and Thought About [by all Buddhas]”? [Because it is declared in the Sūtra that] if any beings should pronounce the Name of Amida and think of him single-mindedly for seven days, or for one day, just once or ten times, they would surely attain rebirth [in the Pure Land].

ここで注意されるのは「一念」である。『教行信証』原文において、この「一念」がもつ意味は、衆生が阿弥陀仏の名前を称念する回数として理解されるのが通常であろう。それは研究会において参照としている他の翻訳が“single utterance”（*The Collected Works of Shinran*）としていることからわかる。だが鈴木は「一念」を“single-mindedly”と訳し、文章全体にかかるように訳している。研究会では次のように訳した。

なぜこの経は（すべての諸仏により）「守られ、念じられている」と呼ばれるのか。（それは経典に次のように説かれているからである）もし、生きとし生けるものが阿弥陀の名前を七日間、あるいは一日、あるいは一回や十回でも、一心に称え、念じるのならば、かならず（浄土に）生まれることを得る。

これにより「一念」とは回数ではなく、「一心に」という、いわば念仏の内実を示す言葉となっているのである。事実、他の箇所でも大拙は“single-mindedly”を何度も用いている。これは大拙が親鸞の念仏の特徴を「一心」として、それを『教行信証』翻訳の際にも、幅広く用いていることを示す。この点から鈴木は『教行信証』原文をいわば表面的に読むのではなく、親鸞がどのように読んでいるかに着目することを第一として翻訳を進めていることがわかる。鈴木は英訳『教行信証』を講読することは、同時に親鸞がどのような意味で文章を引いているかの確認ともなる。つまり、大拙訳を通して、改めて『教行信証』そのものの思想を再考察する機会にも恵まれていると言える。

● 現代の諸課題と対話する研究会報告③ ●

親鸞の生命観は現代に意味をもちえるか

— 自死問題を契機として — (鍋島直樹)

親鸞仏教センター研究員 常 塚 聡

現代という時代が抱えている課題に向き合い、そのなかで宗教は何ができるのか、ということ絶えず問い続けていく営みがなければ、宗教は単なる過去の遺物にすぎなくなってしまふ。親鸞仏教センターでは、現代の課題と第一線で対決している方々との対話を通じて、親鸞の立場からのメッセージを発信していくことを願い、「現代の諸課題と対話する研究会」を開催している。今回は、2010年5月13日に鍋島直樹氏（龍谷大学法学部教授）をお招きして開催された第5回研究会の概要を報告する。

■ 鍋島直樹氏との対話

1989年以来、日本では毎年年間3万人以上の方が自死というかたちで命を終えざるをえない現状がある。この数は、2003年以降続いているイラク戦争による民間人死者数に匹敵する規模である。この数に、統計上自殺とみなされない「不審死」や「孤独死」のケースを加えれば、自死を選ばざるをえなかった人の数は事実上この数倍に上るとの推定もある。その意味で、現代の日本は、いわば「戦場」以上に人命が危険にさらされている現場であるとさえいえるのかもしれない。

そのような「戦場」とでもいうべき現代社会において、宗教に関わる者が活動する余地はどこにあるのだろうか。しばしば聞こえてくるのが、「自殺は悪・罪である」「命を粗末にしてはいけない」という、宗教者の立場から自死を戒める言葉である。

このような発言の背景に、多くの人が自ら命を絶っているという現状への傷みがあることは間違いない。しかし、このような言葉ははたして悲嘆のなかにある人や問題に直面して苦悩する人のもとに届くのであろうか。

鍋島氏によると、仏教では生命を個々の生体に個別の独立したものと考えるのではなく、それぞれが相互に依存しつつ生起しているものであるとする。その意味で、個々の生命は“The Golden Chain”（黄金の鎖）のかけがえのない一つのつながりである、というのが仏教の生命



鍋島直樹（なべし ま なおき） 龍谷大学法学部教授、人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター長

1959年兵庫県に生まれる。龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士課程単位取得満期退学。専攻は印度哲学・仏教学・真宗学。研究テーマは親鸞の生命観・縁起の生命倫理学・浄土教の生死観と看取り・仏教と心理療法など。日本医師会生命倫理懇談会委員、浄土真宗本願寺派ビハール活動専門委員などを歴任。著書に「死別の悲しみと生きるービハールの心を求めてー」（本願寺出版社）、「アジャセ王の救いー王舎城悲劇の深層」（方丈堂出版）、「親鸞の生命観 縁起の生命倫理学」『仏教と生命倫理の架け橋』（共著）「心の病と宗教性ー深い傾聴」（共著）（法蔵館）など多数。

観であると言えよう。一つひとつの生命はそれぞれかけがえのないものであり、それと同時にすべての生命とのつながりとして存在している。

あらゆる存在がつながりをもって存在しているという生命観は、「自殺は悪だ」というように、現実の事柄に理念的な善悪二元論を当てはめるような価値判断を否定する。このような単純な二元論は、現実のただなかにいる人にとっては単なる「他人事」でしかないだろう。むしろ、倫理的な態度とは、善悪どちらとも判断できないあいまいな現実を前にして、それでもなお何かを語らざるを得ないような現場に身を置き続けよ、ということであろう。マニュアル化できない現実から目をそらさず、絶えずその問いかけるものに答え続けようとするのが、宗教のもつ倫理性であり、単純な答えはないとわかりながらもなお現実に対峙していく勇気を与えてくれるものが、宗教のもつ智慧なのではないだろうか。

※鍋島直樹氏との研究会の詳細は、『現代と親鸞』第22号（2011年3月1日号）に掲載予定です。

●『教行信証』真仏土・化身土巻研究会報告●

無量光明土

親鸞仏教センター研究員 花園 一実

親鸞仏教センターでは2010年6月より新たに『教行信証』真仏土・化身土巻研究会を発足し、2011年1月現在、これまでに7回の研究会が開かれている。なお、『教行信証』の原文をテキストとして取り扱う研究会は、親鸞仏教センターでは初となる。研究会の特徴としては、特に引文における乃至箇所（＝親鸞が敢えて文を出していない箇所）や、読み替え（＝本来の漢文からは普通読みにくい親鸞独自の読み方）に注目し、そこから親鸞の意図を読み取ることを試みている。今回は、第1回目の研究会から、「真仏土巻」冒頭の御自釈における「無量寿」と「無量光」の関係性、そして「無量光明土」の意義について報告したい。

■ 無量寿と無量光の関係性

「真仏土巻」には標^{ひょうこ}挙として「光明無量」と「寿命無量」の二願が掲げられている。しかし、「真仏土巻」冒頭^{こじしやく}の御自釈をみると、「不可思議光如来」「無量光明土」と、光明ばかりが前面に出されており、阿弥陀如来の寿命的側面について積極的に語られる箇所は少ない。

そもそも中国浄土教の伝統においては、本来、寿命が重視されてきた傾向がある。それは、梵語 Sukhāvatīvyūha（極楽の莊嚴）という経題を『無量寿経』と翻訳したことや、道綽が『安樂集』第九大門において、「寿命長短」の問題を取り上げていることなどからも窺^{うかが}える。また寿命の延長という命題は、中国人の

もっていた一つのロマンであった。たとえば中国で作られた多くの疑偽經典群は、当時の中国民衆の宗教観を表すものとして重要であるが、その内容には『延命十句観音経』などの経題に示されるように、寿命の延長というテーマがしばしば込められていた。また曇鸞が仏教を学びながらも（曇鸞は当時『大集経』の註釈をしていたとされている）、自らが病に罹^{かか}ったときには、陶弘景のもとに長生不死の仙經を求めていったことも、中国の文化風土に深く根付いていた、道教的思想の影響を思わせる。

一方、親鸞はこの「寿命無量」と「光明無量」の関係について、次のように述べている。

「真実信心^{じんじつしん}うる人は すなわち定聚^{じやうじゆ}のかずの〔に〕入^いる 不退^{ふたい}の位^{くらゐ}に入りぬれば かならず滅度^{めつど}をさとらしむ」（大経讃）と候うは、この度^{たび}この身の終わり候わん時、真実信心^{きんじつしん}の行者^{ぎやうじや}の心、報土^{ほうど}にいたり候いなば、寿命無量^{じゆめいむりやう}を体として、光明無量の徳用^{とくゆう}はなれたまわされば、如来^{しんこう}の心光に一味なり、このゆえ「大信心^{だいしんじん}は仏性^{ぶつじやう}なり、仏性はすなわち如来なり」（涅槃経）と仰せられて候うやらん。

（『真宗聖典』583頁、東本願寺出版部）

このように、寿命無量は如来の体であり、光明無量はそのはたらきであるというのが親鸞の領解であった。言い換えれば寿命とは、光明というはたらきが生み出される本質としての無量寿であり、その意味において、道教的、世俗的寿命観とはまったくその質を異にするものである。言うなれば「長生き」ではなく「永遠」の

象徴としての無量寿であると言える。親鸞が、敢えて寿命について言及せず、光明を前面に押し出したのは、そのような道教的関心から距離をおくという一面があったと考えられるかもしれない。

■ 無量光明土の意義について

「真仏土巻」の冒頭の引文群に引かれている、『平等覚経』『東方偈（往勤偈）』を見てみたい。

速疾に超えて、すなわち安楽国の世界に到るべし。無量光明土に至りて、無数の仏を供養す。（『真宗聖教全書』一・100頁）

親鸞はここで冒頭の御自釈にある「無量光明土」という語の典拠をここで確認していると思われる。この文に注目したのは安田理深（『教行信証真仏土巻聴記』82頁、文栄堂）であった。安田は、本来この原文の文脈で読むのならば、阿弥陀仏国＝無量光明土とは読めない、と指摘する。無量光明土とは、本来は十方諸仏の浄土を表す言葉であって、始めから阿弥陀仏国を意味するものではない。安楽国（阿弥陀仏の浄土）に至ってから、無量の（諸仏の）光明土に至って無数の仏を供養する、というのがより自然な解釈である。しかし親鸞は、この経文の精神を徹底し、安楽国に無量光明土の徳をおさめたのである。その根拠を安田は『浄土論』および『論註』に確認している。『浄土論』『論註』には阿弥陀仏の浄土の菩薩のもつ功德として、「不動遍至」「同時遍至」「無余供養」「遍示三宝」という四種の徳が挙げられている。（『真宗聖教全書』一・334～336頁）これをいま端的に言えば「浄土の菩薩とは、身を一切動かすことなく、あらゆる世界に示現し、仏事をなすのであり（「不動遍至」）、しかもそれは前後なく同時に行われる（「同時遍至」）。そしてその供養は、徹底して一世界を余すことなく行われ（「無余供養」）、それはたとえ三宝なき場所においても例外ではない（「遍示三宝」）。これがいわゆる菩薩の四種功德である。このことより

みれば、阿弥陀仏国とは、西方世界の一仏土でありながら、そのはたらきは一切世界、無量の光明土に徹底しているといえる。『浄土論』『論註』を通すことで、諸仏の浄土は弥陀の浄土のなかにおさめられるのである。このことを踏まえたうえで、親鸞は真仏土を「無量光明土」として表現する。それは一切世界を包んだ、普遍的な真理の世界である。



このように親鸞は浄土ないし如来を、偶像や観念としてではなく、「光如来」「光明土」と、人智を絶した「光明」として表現する。そして恐らくこれは当時において、かなり特色のある説ではなかっただろうか。当時、一般的に仏身については、『観無量寿経』に説かれている「真身観」の仏身や、浄土については『大経』『観経』『往生要集』などに説かれる浄土の相などがよく知られていたと思われる。それはすぐれた相好と、金色の身から光明を放ち、諸仏菩薩を従えて念仏行者を攝取するという阿弥陀仏のイメージや、七重の欄楯、行樹に取り囲まれ、美しい八功德水の宝池を湛え、七宝で莊嚴されたきらびやか楼閣などがある、極楽浄土のイメージである。それに対し、親鸞は前述のとおり、具体的表象を一切加えず、浄土も仏も、ただ光明として表現するのみである。そこには、空想的な表象をしりぞける事によって、純粋な真理の展開として、浄土教を大乘仏教のなかに位置づけようとする思想的動機があったと考えられる。およそ親鸞ほど光明にこだわった僧は他に例がない。「光明は智慧のかたち」（『真宗聖典』554頁）であると親鸞は言うが、どこまでも衆生を救わんと願ってやまない、慈悲に裏付けられた仏教の智慧が、阿弥陀仏とその浄土として、凡夫のうえに展開する。このことを、顕（あらわ）そうとするのが「真仏土巻」の大きな意義ではなかっただろうか。このような視点をもちながら、今後も研究を続けていきたい。

「親鸞仏教センター公開講演会2010」を開催（2010年11月24日）

親鸞仏教センターでは、研究・交流活動をととして対話を重ねてきた「現代」の問題を、親鸞聖人の教えとの接点から考えようとして公開講演会を開催している。その4回目となる「親鸞仏教センター公開講演会2010」を、今年も大谷大学の後援のもと、2010年11月24日にベルサール神田（千代田区）で開催した。

今回は、「『ともに生きる』世界を再生するために」をテーマに、内山 節氏（哲学者・NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）を講師として迎え、「『ともに生きる』世界を取り戻すために」と題してご講演をいただいた。次いで、本多弘之親鸞仏教センター所長の「本願の共同体」と題した講演の後、参加者を交えて意見交換がなされ、有識者やサラリーマン、学生など約100名の参加者と共に、約3時間にわたる熱気に満ちた時間となった。

講演のなかで、内山氏（=写真上）は、ご自身が生活される群馬県上野村では、自然や神仏との生活が儀式や行事によって自治に組み込まれていることを紹介され、「人間というのはこの地球上に極めて能力のない、弱い生き物として生まれた。それがどのようにして生き延びようとしたのかと言えば、多様な関係を作ることによってではなかったか。自然や動物と多様な関係性を作り、その関係を作るために道具や文明を作ってきたのではないか。

現代を見てみると、多様な関係を作って派生した人間が、その自然や他者との関係を否定するようになった。それは人間の本性を自己否定することであり、そのことによって人間社会に混乱が生じてしまったのではないか。

われわれができるのは、人間とは何かを問い直すことではないか。そして、自然や神仏とつながりながら、多様な生き方をしてきたということをもう一度振り返りながら、自然や死者も含めて、「ともに生きる」という世界を作るようになったとき、生きている人間同士も「便利だからともに生きよう」ではなく、人間の本性に根ざした「ともに生きる」ということができるのではないかと話された。

続いて本多所長は、『大無量寿経』の第18願の「唯除の文」を引かれ、「現代は、人間の関係性が切れていっている時代だが、本当は自分が排除されるような身であるという自覚を、如来の大悲のまえてもつことで、お互いに相手が許せる、“自分で許すことはできないが、如来が許している”という緩やかな関係ができるのではないかと。そして、殺伐とした都市社会に、新鮮な水を供給する本願のオアシスのようなはたらきをもった、緩やかな共同体があってもいいのではないかと思う。

如来の大悲の眼から見れば、己の存在は愚かであるという眼が少しでも開けると、厳しい一元的な価値基準ではなく、少しく違う価値基準の空間というものを生きる力が与えられるのではないかと語った。

今後も、親鸞仏教センターでは、年一回の公開講演会を継続し、共有できる課題は何か、この時代を生きる人間の心奥の宗教的要求との接点を大切な問いとしてもちながら、親鸞聖人の思想、信念を表現していきたいと考えている。

※「公開講演会2010」の講演記録は、『現代と親鸞』第23号（2011年12月1日号）に掲載予定です。



親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円（送料込）で、情報誌『アンジャリ（anjalī）』（年2回）と機関紙『親鸞仏教センター通信』（年4回）をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

■申し込みと問い合わせは、

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

まで。

会員
募集中!

御 礼

11月から開催いたしておりました、3名の研究員による全12回公開輪読会につきまして、大勢の皆様のご参加をいただき、意義のある輪読会となりました。御礼申し上げます。

あ と が き

東京大学東洋文化研究所安富研究室に、親鸞の考え方で既存の学問を読み直していく「親鸞ルネサンス」という研究が立ち上がる。経済学者の安富歩氏は、現代の人間の生きづらさの正体と、その克服を課題にされ、さまざまな分野の研究に取り組む中で親鸞思想に出遇われる。現代の学問、教育、倫理、制度、経済には、人の心に蓋をして縛っていくはたらきがあり、それが閉塞感を生み出している。親鸞思想にはその閉塞感を打ち破る力がある。諸学を「親鸞で研究する」という方向を重視したいと安富氏は言う。その考えを『アンジャリ』21号に執筆いただいたの

『親鸞仏教センター通信』2011年6月1日号は休刊いたします。

で、ぜひお読みいただきたい。この取り組みに期待し、当センターも交流を深めたい。（木曾）▼「現代と親鸞の研究会」に「べてるの家」の向谷地生良先生をお招きしてお話を拝聴した。心の病について、病であるのかないかの境目を線引きすることはできないのではないかと思った。また、ゆるやかな「場」を創っていくことの大切さを感じつつ、耳の奥には「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」との宗祖のお言葉が響いていた。向谷地先生の取り組みに敬意を払わずにはおれない。

（大江）▼人と話していて、全く違う次元にいるような錯覚に陥ることがある。同じ空間で同じ話をしているはずなのに言葉が通じず、「異次元の宇宙人」と思う。最近、「対話」について話題に挙がることが多い。分かってほしい、また分かってほしい気持ちがぶつかり、試行錯誤するが結局最後は自分を押し通したい。遠くの人なら「関係ない」で済むが、身近である程「関係ない」では済まない。宇宙人と話す言葉を持ち合わせていない私は、相手から見れば宇宙人だろう。宇宙人同士、共通の言葉を持てるのか。それを探ることを「対話」と言うのだろうか。（鈴木）